

# 第1回現代龍馬学会スタート

## 浜風を熱風に変えて！

龍馬の研究と、何より龍馬思想の行動発信を掲げて「高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会」が4月18日スタートした。一年がかりの構想がやっと実った。会員は地元を中心に県外にも広がり70人を越えた。坂本龍馬記念館からの“発信”として講演、機関紙「飛騰」の増ページ、紀要の発行などを中心に活動を広げていく。

### 宣言

何もかもが混迷を深め、未来へのビジョンが失われてしまったかに見える現代。坂本龍馬の思想と行動に学び、その精神を今日に生かそうとして、高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会は発足した。

準備に約一年、県の内外から参加した会員は六十二名。尾崎正直県知事、坂本家の縁者坂本登氏のご出席のもと、発会式を行い、会員それぞれに協力・交流しながら、学会を運営し発展させていくことを申し合わせた。

引き続き、来会していただいた多数の一般参加者とともに、「夢」と「出会い」をテーマにして、七人の会員による研究発表会を開催した。いずれも新しい知見を盛り込んだ、創意に満ちた発表であり、その後の分科会での熱心な討論と合わせて、学会のスタートにふさわしい充実したものとなつた。

龍馬が夢見たもの、それはヒューマニズムに根ざした新しい日本の建設だった。道義が廃れ、理想が失われつつある現代、龍馬の意志と情熱を受け継ぎ、私たちの時代と社会を見つめ直していくたい。

平成二十二年四月十九日  
高知県立坂本龍馬記念館  
現代龍馬学会

### 現代龍馬学会最初の宣言文



会場の桂浜荘は熱気に包まれた



来賓挨拶で熱く龍馬を語る尾崎正直知事



「龍馬精神で行動を起こそう」と語る坂本家9代目当主坂本登さん

会場となった龍馬記念館横の国民宿舎「桂浜荘」には開始時間9時30分前から、参加者が姿を見せた。待つのもどかしげな様子。

来賓で出席をお願いした、坂本家9代目の当主、坂本登さんは「研究だけでなく龍馬イズムを実践していく」との会の発展を期待している。また、来年のNHK大河ドラマ「龍馬の夢」を語り合い、最

馬伝」対応に全力の尾崎正直知事からは「私は龍馬ファンです」と前置きして「龍馬精神を信してほしい」と祝詞を頂いた。

総会後、早速7人の研究発表、夜は懇親会での議論の続き。そして、翌日は「夢」「出会い」の二つの分科会に分かれて前日の研究発表を基に再度討論。「龍馬の世界」を楽しんだ。

一日とも快晴に恵まれた会は、吹き抜ける浜風を熱く感じさせるほどの熱気に満ちていた。

森 健志郎

## 分科会「夢」

### いかに子ども達に伝えるか

「夢」に関する分科討論会では、まず最初の2時間、前日研究発表された4名の方々からそれぞれ10分程度、研究発表で言い足りなかつたことなどを中心に補足説明していただいた後、参加者からの質問を受けた。

内容は、北代淳二氏の「ジョン万の夢・龍馬の夢」、渋谷雅之氏の「横笛のことなど—北海交易の夢ー」、渡辺瑠海氏の「夢分析に見る『幕末』・宮川禎一氏の『書簡にみる龍馬の心』である。やはり龍馬さんの研究となると、研究者も参加者も非常に熱がはいる。予定していた10分間を軽く超えるよう、より詳しいエピソードや資料説明があり、参加者からも色々な質問がだされ、白熱した討論となつた。



坂本世津夫さん

さんのようなグローバル的感覚を持ちローカルに動く。プラス志向で夢を実現していく行動力。そして土佐の先進性(造船など)。この龍馬さんの夢を、次代を担う子ども達に如何に引き継がせるかである。「三人よれば文殊の知恵」ではないが、みんなと一緒に考える、こういうスタイルが、やはり色々なことを発見できる源になると感じた。独りで研究していても、なかなか気づかなかつたことが(あかもちや等)、色々な方の意見を聞くことによって発見できる。分科討論会は非常に有意義なものであった。



分科会後のミニコンサートで演奏する西村直記さん

午前11時10分より、今回のテーマである「夢」に関して、龍馬さんの「夢」(夢の本質)を現代という時代に如何に実現していくか、発表者と一緒に全員で議論を行つた。ジョン万次郎

## 分科会「出会い」

### 人生積極的に出会い求めて

私たちの「出会い」分科会は、「出会いの達人」であった龍馬から何を学び、現代にどう生かすかということをテーマに進め、まず最初に前田由紀枝氏、永国淳哉氏、村上恒夫氏の三氏に、それぞれの出会いを語つていただきました。

前田氏は、龍馬記念館に出会ったおかげで龍馬に出会い

い、それが縁で長崎、京都、北海道まで交友が広がり、一層龍馬にのめり込んでいった体験を語られ、浦戸育ちの永国氏は、銅像前にまだ人が少なかった少年期に、桂浜から太平洋を見ながら龍馬を思つた日々を話されました。また

村上氏は、大洲市職員時代に出会つた龍馬脱藩の道を

の志士研究者と地道な交流をすべきだ」「県外にもっと発信できないか」など、多くの意見が交わされました。最後に、これらの意見をどう現代に生かしていくかを検討し、

①子どもたちがもつと龍馬に出会える方法を模索しよう。  
②それぞれの団体がいろんな違いを超えて、一致して行動が起こせるようにしていく。

この三氏の龍馬との出会い談を受け、会場からは、三氏への質問を含め、参加者それぞれの出会い話、引き続いて意見交換を行い、「もつと実地に脱藩の道を行くべきではないか」「もっと他

③私たちも龍馬のように怖がらずに、自分から積極的に出会いを求めていく。ということを確認し合い、「出会い」分科会を終了しました。



新本勝庸さん

# 高知県坂本龍馬記念館・現代龍馬学会

## 私のテーマ

### 「夕顔」コンピューターグラフィックで復元

図面イギリスに求めて ————— 小松茂久



4月のある日、電話が鳴った。「『夕顔』の資料が見つかったらしい。できれば今日龍馬記念館に行きたいのですが」永国会長の声だった。これが『夕顔』の真の姿を求める調査の始まりであった。土佐藩船『夕顔』、建造時の名前をShooey Leen(シューリーン)と言い、イギリスで建造し、中国へ輸出された船である。後に、岩崎弥太郎の九十九商会で『太平丸』として使われた船でもある。総トン数(650t)当時の船としては比較的大型船だ。仁井田の神社で絵馬が見つかり、それから模型が作られた。しかし全貌を明らかにする正確な資料は存在していない。今回資料が見つかったのは、ロンドンにあるMaritime Museum(海事博物館)であり、その資料は、進水式を祝う当時の新聞記事と進水時のSurvey Report(検査報告書)である。

それから2週間ぐらいが経った日曜日、再び永国会長から電話が来た。「高知大学にダレンさんという教授がいます。『夕顔丸』の資料に興味を持ち、夏休みには、ロンドンへ調査に行くことをと考えているようです。一度会いたいと思います」私の答えは「今から行きましょう」。

図面が残っていれば、絵馬からの復元ではなく、3次元CADによる復元も可能となり、いわゆるグラフィック化できるのである。一般配置図はもちろんのこと、強度を審査するためには中央横断面図、鋼材配置図などが必要である。復原性を審査するためには、排水量等曲線図、船体容量図、積付要領図などが必要であり、これらの元となる船体線図から船の水面下の型が特定できる。安全性を審査するためには、Fire-Control Planなどが必要であり、救命艇など、大型儀装品の配置の特定が可能となる。以上の情報量からグラフィック化ができるのである。

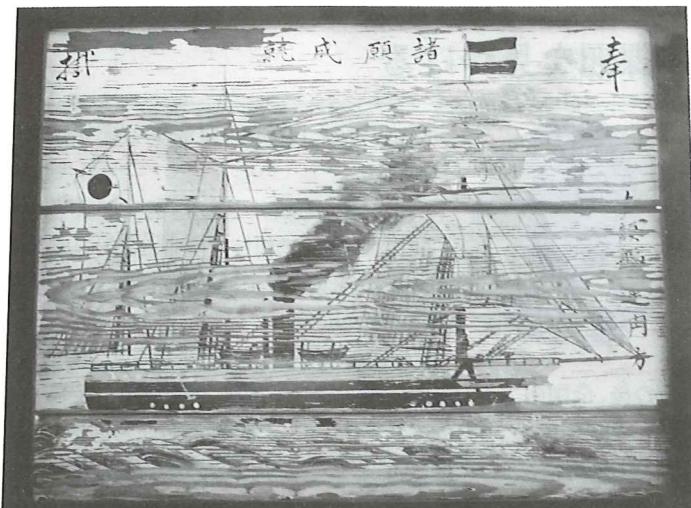
このことを永国会長と訪れた潮騒薫る宇佐のダレン家で話した。ダレン教授は、文部科学省の科研費などでこの歴史的価値のある『夕顔』の調査を8月20日以降行うということであった。私は、ダレン教授が調査するに当たって、見つけることができそうな資料類のリストをmailで送ることを約束した。

次の日、私は国土交通省本庁で造船関連の課長をしている大学時代の1級先輩坂下氏に電話をした。龍馬の船中八策で有名な『夕顔』という船の資料を英国のmaritime-museumで見つけた。同船の図面がLlyod'sに残っていないかを確認したい旨の相談である。即座に先輩は反応し、Llyod'sの横浜事務所にいる人物を相談相手としてリストアップしてくれた。川井さんという人物である。また、私が電話で報告した内容を川井さんにメールしておくということだった。30分もしないうちにそのmailのCCが私のパソコンに飛び込んできた。実に要領を得たmailであった。

早速次の日、私は先輩が紹介してくれたLlyod's横浜事務所の川井さんに電話をしていた。

「国土交通省の先輩から紹介をいただきました高知の小松です。先輩からのmailにもありますように土佐藩船『夕顔』の図面がLlyod'sに残っているのではないか?と探しています」

川井さんの返事は「Llyod'sでは就航している船、また廃船され



車を運転しながら私は考えた。当時の新聞記事によれば、Shooey LeenはLlyod's(ロイズ)船級協会に入級していたようである。その進水時のSurvey Report(検査報告書)が見つかったのである。

ここで、船級入級の意味を皆さんに知っていただきたい。そもそも船級入級とは船舶保険を掛けることを意味する。入級するために堪航性(seaworthiness)の有無が評価されるということになる。平たく言えば、船は航海中に大きな波に遭遇するのであろうが、船体はその波に耐えられるであろうか?(強度:Strength)また、貨物を多く積むであろうが、荒れた海の中でその貨物は安全であるのか?(復原性:Stability)また、そのような船、航海で多くの乗組員は安全であるのか?(安全性:Safety)などである。

進水した1863年の検査だが、当時も現在も同じ考え方だと思われる所以、当然、造船所から船級協会に提出された図面(審査された図面)は現在と同じだと思われた。私は興奮を覚えた。これらの

されても5年間は造船所から提出された図面は保管しますが、1863年のものは当然無いでしょう。聞いて一瞬力が抜けた。「では、無理ですね」言葉にそれが表れていたはずだ。こちらの気持ちを察したのだろう。次の川井さんの言葉が私を蘇らせた。

「Llyod'sでは古い船の図面は保管しませんが、造船所は古い船の図面も保管している可能性があります」

「造船所は、合併などで会社が形態を変えている場合はどうでしょうか?」(私)「会社が合併などで経営形態を変えた場合でも存続会社がその技術的資料を引き継いでいるものです」(川井)「見つかった資料のコピーを送りますので、どうか調査にご協力ください」(私)

胸の高鳴りを抑えながら電話を置いた。私は希望を持って受話器を置いた。これで『夕顔』の資料は出てくると確信した。

私はイギリスの船級会社Llyod'sのメンバーである川井さんに今回見つかった資料のコピーを送った。こちらとしては、イギリスの造船会社の歴史、そして技術的資料の有無を調べてくれているものと期待している。そして、ダレン教授のイギリス訪問が実のあるものとなることを念じている。さらに、来年の大河ドラマ「龍馬伝」の中で、コンピュータグラフィック技術で復元された『夕顔』の中で船中八策を唱えている龍馬の姿を想像しながら……。

(完)

## 「ぼれ話」

### 「龍馬の土佐弁」

現代龍馬学会は順調な滑り出しでスタートしました。研究発表だけでなく「夢」と「出会い」をテーマに、会員や一般参加者の交流する場として大いに盛り上がりました。

当日、こんなことがありました。

京都国立博物館考古室長・宮川禎さんが学会発表で引用された資料、慶應二年月

二十日(新説)の坂本春猪あて龍馬書簡の冒頭についてです。

「春猪どのよ。此頃ハあかみちやとおしろいにてはけぬりてぬりくつぶしもし略」。

宮川さんはこの中にある「あかみちや」という単語の意味を「あかもち屋(高知城下の化粧品店)か」と表現し、的確な意味であるのかどうか不明であることを話されました。

発表後、渋谷雅之さんから、「みつちや」とは土佐弁で疱瘡(ほうそうのことだと教えられた宮川さん。「学会こそその収穫。実際に面白いですね」。

『土佐方言集』(宮地美彦著、高知市民図書館)を開くと、「みつちや」とは「痘痕面(あばたづら)。顔が赤くみつちやになったのを赤みつちやという」とありました。また、「坂本龍馬とその一族」(土居晴夫著、新人物往来社)でも、「あかみちやは疱瘡の跡のあばたのこと」とすでに紹介済み。

前田 由紀枝

## コラム 龍馬のこと 私の人生にも影響

植田 英

現代龍馬学会の分科会で、永国会長が「昔は龍馬像には人がおらん寂しい所じやつた」と発言された。

それについて元県職員の会員が「坂本龍馬記念館が高知県に寄贈されたとき、県の教育関係者の幹部が、昔は小学校では龍馬のことは教えない方針だった。理由、龍馬は脱藩者だ」と補足した。

この二人の発言で、私が今までずーと疑問に思っていた謎が解けた。

私は団塊の世代の人間で、生まれは高知市の隣の南国市、小学校の遠足は春は桂浜、秋は五台山と決まっていた。

桂浜での遠足で先生が龍馬像を案内したり、龍馬ことについて話してくれた記憶がない。

なぜだろう、そのせいでもないが、司馬作品の『竜馬がゆく』を読んだのが大人になってからである。それでも坂本龍馬を育んだ高知県人として龍馬ファンとして胸をはっていたが、そのプライドがもう崩れたのが1991年に高知県が主催した「龍馬海援隊クルージング」というイベントであった。

一応社内では龍馬ファンを自負していたこの私にイベントに参加するように業務命令がくつた。

ここでたくさんの県外の龍馬ファンから龍馬に関する質問を受けたが、私は全く答えられなかった。強いカルチャーショックを受けたのである。

それ以来、龍馬の本を買あさり独学で勉強したり、地元の龍馬研究会や東京や大阪の龍馬会に入部して人脈や知識を広げた。もっと早く坂本龍馬の先見性や人間力・行動力などを学んでいれば、私の人生も変わっていたかもしれない。

だからこそ、現代龍馬学会を通じて、次世代を担う子供たちにぜひ龍馬の魅力を伝えていきたい。

## 会員便り

### 課題を見つける

会長 永国 淳哉



「各会員が、自分の“研究テーマ”を持つてほしい」。

これが会長の願いである。第一回大会で発表されたテーマで判って頂いたように、我々の学会は、従来の「歴史研究」のジャンルの範疇よりはるかに広い。

私は書誌研究として、「龍馬の歌」を発表。その後、全国の方々から頂いた情報を追加し、現在修正して論文を書いているところである。

「夢分析にみる“幕末”」を発表した渡辺瑠海さんは、6月の例会で「龍馬の資質」をテーマに取り上げた。

月例会は、最初の1時間は事前に決めた「テーマ」で、会員も一緒に話をし、情報を交換し理解を深める場としている。

こうした月例会の勉強の場で、自分の新しい「テーマ」を見つける会員もいる。龍馬記念館の館内を散策しながら、その「テーマ」を深めていく方もいるだろう。

私は、龍馬像にいき、司馬遼太郎先生の「世界中であなたが立つ場所はここしかない」の言葉を反芻する。「奢りすぎた20世紀の大人たちよ。21世紀の故郷の松や海を守っているか」

## 「高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会 事務局便り」

「高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会」がいよいよスタートしました。皆様のアイデアと活動を原動力として、内容豊かな学会に発展させていきたいと思っております。お気付きの点などございましたらお気軽に事務局へご連絡ください。よろしくお願ひいたします。

事務局:中村 昌代

高知県立坂本龍馬記念館 〒781-0262 高知市浦戸城山830  
TEL(088)841-0001 FAX(088)841-0015 <http://ryoma-kinenkan.jp>